

- 岸岳系から銅版摺まで -

奈良女子大学構内遺跡出土遺物にみる

肥前陶磁の世界



近世奈良町で使われた器

奈良女子大学

1300年の古都奈良では、都が他に移ってからもその外京部分は中世南都・近世奈良町として人々が住み続けてきた。こういった累世的な都市遺跡を発掘調査する場合、中・近世の遺構・遺物にはあまり注意が払われないことが多いのは残念な事実である。

奈良女子大学では、その構内に近世の奈良奉行所が存在したことによって、新しい時代の考古資料の調査にも留意してきた。いっぽうで、近年、江戸時代や近世陶磁器に対する学問的関心が高まり、その成果をもとにして300年近い長い期間もこれらによる時期区分をはじめとするいろんな問題に取り組めるようになったことは大きい。

奈良女子大学では20年以上にわたって構内遺跡の発掘調査を続けてきたが、奉行所濠をはじめとして出土した大量の近世（近代も含む）陶磁器は、その資料的価値が研究者間で高く評価されてきた。しかし、これらは紹介する機会に恵まれず今日に至っている。そのため、少しでも知ってもらうための簡単な目録作りとして、今回の写真集を出版することを考えついた。この写真集によって、近世陶磁器についての文化財としての知識が広く一般の人々に普及することを願うものである。





白磁皿



青磁碗



青磁番が・碗



明代の染付磁器



清代の赤絵磁器



清代の染付磁器の鹿



絵志野皿



美濃天目茶碗



美濃天目茶碗



龍?



備前焼壺



鳥



初期伊万里磁器の鹿





唐津陶器

唐津は1580年代に生産がはじまつた。最初は現唐津市の南、岸岳周辺で朝鮮人陶工による生産が開始されたとされる（岸岳系）。まもなく生産の中心は伊万里地域に移り、16世紀末～17世紀初頭（慶長年間）に生産・流通の最盛期を迎える。構内遺跡では、奉行所濠から碗・皿・鉢・櫛・向付など多様な器種が出土しているが、碗が多く皿は少ない。皿も窯の中での目積みの際、砂を使う砂目積が粘土の小塊を使う胎土目積より多い。慶長年間（1596～1614）に胎土目積から砂目積に移行したことを考えると濠内出土の唐津は様相が新しく、したがって絵唐津も量は少ない。



奈良奉行所四周の濠



奈良奉行所は関ヶ原の戦後、大阪城包囲網の一環として徳川家康によって興福寺の西北に築かれた（1603～04年）。その規模は180m四方を幅10m前後の濠で囲い、さらに内側には土塁が存在したことが絵図などによって知られる。これまで濠の東北隅と西南隅が発掘調査されているが、東北隅では北側の濠（上端幅9.0m、底面の幅4.8m、深さ2.2m）が27.5mにわたって検出された。



奉行所濠と北魚屋西町（南から）

伊万里磁器

伊万里磁器生産の開始は、李參平が有田泉山で白磁鉱を発見し、磁器をはじめて焼いたのが1616年のことと伝える。初期の伊万里磁器の様相は不明な点が多いが、皿で砂目積の目あとを残すものがあり、唐津皿の焼成技法を受け継いだものであったと考えられる。17世紀中頃以降になると、伊万里磁器は日常雑器の中核を占めるようになるが、構内遺跡出土の伊万里磁器の変遷を、器形・絵付けの方法・焼成技法などについてたどってみると、生産地でのいろいろな事情をうかがい知ることが出来る。



砂目積の唐津陶器と伊万里磁器

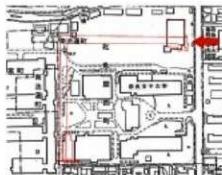


砂目積初期伊万里磁器



福字瓶

濠内からは近世・近代の陶磁器・瓦・木製品その他が大量に出土した。これらは奉行所に関係があるというよりは、濠の北に存在した北魚屋西町で使用されたものと考えられる。



この北濠の最下層から、やはり唐津が碗326点、皿74点と大量に出土したことは注意される。



奉行所濠出土の絵唐津



伊万里磁器創生期・17世紀前半～中頃

17世前半に伊万里磁器の生産が開始され、
1640年代には全国的に流通するようになる。
碗は口縁が外に開き気味のもののに、天
目タイプや筒碗がある。皿は口径に比べて
高台の径が小さく、絵付けでは月兔文の皿
のように呉須（コバルト青料）を筆に含ま
せて吹きつける吹墨技法が特徴的である。

奉行所出土のこの時期の染付皿の中に、
砂目積痕跡が認められるものがあり、初期
伊万里の様相をさぐる重要な資料となっ
ている。また、碗では筒碗は認められない。
龍（？）を描いた皿は五枚一組であるが、
生産地の有田では未だ窯が見つかっていない。





17世紀前半～中頃の大型磁器

海外発展の時期・17世紀後半

17世紀後半になると国内の流通だけでなく、明末・清初の騒乱によって中国磁器が得られなくなったオランダ商社が日本に大量注文を行った。このため伊万里では大量生産と同時に中国磁器のレベルに迫る製作技術を要求されることになる。皿の底が垂れるのを防ぐハリ支え、高台疊付に施釉出来るようにした高台内蛇ノ目軸ハギ、平面変形皿に対応するための貼付高台の出現がこの要求に応えるための製作技術の改良である。絵付けでは墨書き技法が始まった。呉須を塗る以前に墨で文様を描いておくと、焼成後墨塗り部分が青の中に白く出てくるというものである。



17世紀後半の磁器



ハリ支え



墨書き



貼付高台



高台内蛇ノ目軸ハギ



角福



「大明」銘



その後の唐津陶器・17世紀中頃以降

伊万里磁器の出現後も、唐津の系譜を引く陶器生産は続けられた。現佐賀県武雄市を中心とする地域で二彩・銅線釉・三島手の製品が代表的なものである（武雄系）。これらは寛永14年（1637）に鍋島藩が有田・伊万里地方の窯場の整理を行なった結果、働き場を失った工人達によるものと考えられている。こういった陶器の中で京焼風陶器と呼ばれる胎土・釉色・質入の具合・刻印などを当時高級商品化していた京焼に似せてつくられた製品がこれらの窯で焼かれた。発掘調査で出土する真正の京焼製品が稀少なのに対し、この京焼風陶器はほぼ全国に分布し、この時期の特定商品に対する意識が今とあまり変わらないことを知る。



使用されていた刻印（2倍に拡大）



三島手大皿

国内市場の拡大・17世紀末～18世紀後半

清朝磁器の復興によって輸出は伸びなくなり、
国内市場の拡大に力が注がれるようになる。

国内向けの日常雑器としてくらわんか手と呼ばれる
磁器が大量生産され、近世において最も広く
伊万里磁器が普及した。このため絵付においては
コンニャク判・型紙等が考案され、大量生産に
よる安価な商品を作り出すことに成功した。

コンニャク判は印判を使って施文すると推定さ
れているが、具体的な方法は明らかでない。従来
は手書きであった見込みの五弁花にも使われるよ
うになる。型紙は文字どうり文様を切り抜いた型
紙を器にあて、具須を塗って絵付けする技法で、
磁器には18世紀前半に限って用いられ、次には明
治10年代に盛行する。このほか、蛇ノ目凹型高台・
渦福字・「大明年製」崩れ銘なども大量生産を意図
した結果の産物である。

なお、18世紀後半～末においては、青磁染付意匠の
蓋付碗・丸碗・筒型碗が盛行するが、器形から
見て蓋付碗は次の広東碗につながっていくべき
ものであろう。



17世紀末～18世紀後半の磁器



色絵水溝



くらわんか手



コンニャク判のくらわんか手



五弁花コンニャク判



蛇ノ目凹型高台



コンニャク判



型紙留



渦福



「大明年製」崩れ銘

焼継とさらなる変容・幕末（19世紀前半）～明治

幕末を代表する器形は広東碗である。高台が高いなどそれまでにはなかった特徴があり、清朝磁器の影響だという説もある。

焼継とは破損した磁器を白玉と呼ばれる船ガラスを使って接合修復することで、18世紀後半以降に江戸・関西を中心に流行した。焼継師という専門職人もいて、商売として成り立っていたらしく、明治頃まで残っていた。

奉行所濠からも焼継磁器が多数出土しており、これは諫川源之助が経営する「かわちや」という旅館で使っていた器であったと考えられる。いっぽうで、北小路町の町屋のゴミ捨て穴から出土した焼継磁器は大型のものや色絵などの上物のみに見られ、器使用者の性格



与力屋敷と東側の町屋

奉行所東側の正門（現在の大学の正門と同じ場所）の道を隔てた東側は与力屋敷であった。現在は大学の国際学生寄宿舎となっている。

絵図等によれば4～5軒の与力屋敷が南北に並んでおり、その背後すなわち寄宿舎敷地の東半は屋敷とは背割り状態の町屋があったと推定される。

与力屋敷側では、18世紀前半以降の井



によって普及率が異なることは注意されよう。

広東碗よりやや遅れて、口縁部を少し外反させた端反り碗が出現し、明治にかけて多く作られる。縁付けも焼錠に対抗すべく安価・大量生産を志向して型紙摺が行なわれ、さらに明治末年からは銅版摺が流行する。



かわちやの焼錠磁器



広東碗・端反碗



北小路町町屋の焼錠磁器

戸・ゴミ捨て穴が多く検出されたが、出土陶磁器の内容は、日常雑器以外に、中国明代の赤絵磁器・韓州窯産の陶製壺・朝鮮王朝（李朝）の白磁碗・注連縄や小槌を描いた京焼碗・色絵磁器など豊富な内容をもっている。

これは江戸時代の武士階級の日常生活で使用された器（うつわ）の様相が、彼らの経済力や教養をある程度反映していることを物語っていると言えよう。



東側の町屋の磁器

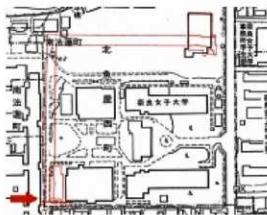
北小路町の町屋

奉行所西濠から西へ150m離れた現奈良市北小路町で近世から近代にかけての町屋が発掘された。この町屋は18世紀後半までは墨作り工房を兼ねた墨屋であったが、次の段階～近代初頭の性格が、まだ不明確でないしかし、道路を現在と同じ発掘区の東側に考える玄関近くに井戸・トイレ、奥まった部分にゴミ捨て穴が配置されていたことが知られる。



北小路町の町屋（北から）





明治末年の陶磁器

近代陶磁器の良好な資料

小規模な工事に伴う立会調査であったが、濠の西南隅の西岸を確認している。それに伴って大量の陶磁器が出土した。型紙摺の端反り碗・銅版摺の皿や湯呑茶碗・色絵の小杯・絵付けのある陶器・信楽系の行平鍋など様々である。これらは濠を最終的に埋め立てた土の中に含まれていたものであると認められた。奉行所濠は奈良女子大学の前身である奈良女子高等師範学校建設に先立って埋められたから、明治末年のことと考えられる。したがって、これらの陶磁器の年代は明治時代の終わりごろである。このことと型紙摺が明治10年代にはじまり、銅版摺が明治後期～大正ごろに行われたという事実とも矛盾しない。



課題

大学構内の発掘調査を長期間続けてきて、出土した陶磁器の量は膨大なものであるが、いまだ確かめられていないものがある。罐部と柿右衛門である。どちらもそれらしい破片が北小路町の調査で一点だけ出土している。いつか本物かどうか見極めたいものである。

近世の器は肥前陶磁器ばかりではない。中世以来の信楽・備前・美濃などの陶器も引き続き奈良にもたらされたし、京焼やそれを意識した信楽系の製品も18世紀前半から見られる。18世紀後半になると信楽系は生産地を拡大し、日常雑器中に一定の割合を占めるようになる。また、瀬戸でも磁器が焼かれるようになる。この他に、土師器の皿や瓦質土器火鉢や植木鉢も作られ続けていたことを忘れてはならない。さらに、何と言っても、土以外の素材、木製の漆塗り製品（主に碗）の普及が著しかったことも重要である。

このように器に限って取り上げてみただけでも奈良女子大学構内遭跡出土遺物は豊富な内容を持っている。今回はその一部しか紹介できなかつたが、いずれ改めて他の器についても紹介する機会をもちたい。



（漢詩の部分）



漢詩人物図香炉（漆緋ぎ）

《参考文献》

奈良女子大学『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅱ(1984年)

奈良女子大学『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅳ(1989年)

奈良女子大学『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅴ(1995年)

奈良女子大学『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅶ(2004年)

坪之内 徹「奈良奉行所とその周辺の近世初頭の陶磁器」

(『東洋陶磁』第十九号、1991年)

坪之内 徹「焼締磁について」

(『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅷ、2004年)

坪之内 徹「奈良奉行所」(『考古学から見る日本歴史』、未刊)



佐賀県立九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶磁』

(1984年)

佐賀県立九州陶磁文化館「窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷」

(『肥前地区古窯跡調査報告書』第1集、1984年)

佐賀県立九州陶磁文化館「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」

(『肥前地区古窯跡調査報告書』第3集、1986年)

大橋康二「肥前磁器の流れ」

(『季刊考古学』第13号、1985年)

大橋康二「肥前磁器の変遷- 技法と器形から見た-」

(佐賀県立九州陶磁文化館『柴田コレクション展(Ⅰ)』、1990年)

大橋康二「肥前磁器の変遷- 文様を中心として-」

(佐賀県立九州陶磁文化館『柴田コレクション展(Ⅱ)』、1991年)

大橋康二「最近の肥前陶磁」(『考古学ジャーナル』410、1996年)



奈良女子大学構内遺跡出土遺物にみる
肥前陶磁の世界
平成16年3月30日 発行
編集 奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会
発行 奈良女子大学
印刷 株式会社新踏社

